

医学科1年次学生に対する、模擬患者による コミュニケーション実習の試み

Attempt of Communication Training by Simulated Patients for 1st Grade Medical Students.

加藤 博之*、松谷 秀哉*、大沢 弘**

Hiroyuki KATO, Hideya MATSUTANI, Hiroshi OSAWA

要旨

コミュニケーション能力は医師が有すべきプロフェッショナリズムを支える重要な要素である。今回、コミュニケーション教育の一環として、医学部医学科1年生が模擬患者と対話する実習を行なった。具体的には、まずコミュニケーションの基本を講義した後、学生が模擬患者に対し「自分はこんな医師になりたい」をテーマに5分間話をした。自分の思いを上手に伝えるためには、話したい内容を要領よくまとめるだけでなく、挨拶や自己紹介、話す速さ、声の大きさ、言葉づかい、表情やしぐさなど、あらゆる要素を動員することが求められるが、初対面の人の前で、これらを上手に行なうことは意外に難しいことを、学生たちは実感していた。更に、実際の医療現場では、初診の患者は診察室で医師と相対したときに、同様の思いを抱いていることを想像できていた者もいた。人間を相手にする医師という仕事には、コミュニケーション能力の習得が欠かせないが、本実習がその良きスタートとなったことが示唆された。

キーワード：プロフェッショナリズム、コミュニケーション、模擬患者、医学生

【背景と目的】

医師という職業に就くためには、専門的な医学知識と医療技術の修得が不可欠であるが、同時にこれらを支える「職業倫理」(Professionalism)を修得することが極めて重要である。医師のProfessionalismは以下の3つから成る。

1. Public professionalism (社会に対するプロフェッショナリズム)

社会から期待されている役割を果たすこと。即ち医師としての社会的責任を果たすこと。

2. Intrapersonal professionalism (自分に対するプロフェッショナリズム)

職業人として、自らに厳しく、たゆまず精進を続ける姿勢。己の限界をわきまえ、恣意的な診療をしないこと。

3. Interpersonal professionalism (他人に対するプロフェッショナリズム)

患者・家族、同僚など、他者に対し、常に誠意や思いやりをもって配慮ができること。相手を尊重し、十分なコミュニケーションを取ることができること。

これらは一朝一夕に身につくものではなく、医学部入学後から時間をかけて修得してゆくものであ

* 弘前大学大学院医学研究科総合医学教育学

Integrated Medical Education, Hirosaki University Graduate School of Medicine

** 弘前大学医学部附属病院総合診療部

Department of General Medicine, Hirosaki University Hospital

る。本学医学部医学科では平成 21 年度から 1 年次学生に対し、新教育科目「臨床医学入門」を開講している。本科目は 1 年生に入学早期より医師になることの自覚を促し、「プロフェッショナリズム」を修得させるための第一歩として位置づけられ、①積極的に自ら学ぶ姿勢の定着、②社会人としての基本的態度の修得（挨拶、言葉づかい、マナーなどを含む）、③他人に対する思いやりや共感力の醸成、④「医師不足問題」に対する当事者意識の涵養、⑤地元地域社会に対する理解、などを教育目標として掲げている。

これらを達成するためには、人と人とのコミュニケーションのとり方を教育することが重要な柱となるのは明らかである。しかしながら 1 年次の医学生に対するコミュニケーション教育を、どのように行うかについては、具体的な方略が確立されているわけではなく、各大学が試行錯誤しながら行っているのが現状である。一方、模擬患者（Simulated Patient あるいは Standardized Patient。略して“SP さん”とも呼ばれる）とは、医学生に対する教育のために、“患者役”を務めてくれるボランティアであり、本学では従来から 4 年次末に行なわれている OSCE（Objective Structured Clinical Examination：客観的臨床能力試験）および臨床入門科目「Pre BSL」の中の「医療面接」の教育に参画している。5 年次から“Student Doctor”として臨床実習のなかで実際の患者に接する学生にとって、模擬患者による医療面接のトレーニングは不可欠なものであり、医学生の態度面での教育やコミュニケーションの教育に大きな役割を果たしている¹⁾。今回、1 年生への教育「臨床医学入門」にも、この模擬患者に登場してもらい、「模擬患者さんと話してみよう」と題するコミュニケーション教育を試みたので、これについて報告し、考えられる成果を検証したい。

【対象と方法】

対象としたのは本学医学部医学科 1 年生約 100 名である。4 月から年間を通じて開講している科目「臨床医学入門」の一環として、「模擬患者さんと話してみよう」と題し、10 月～12 月にかけて行なった。「模擬患者さんと話してみよう」は 1 回の講義と 1 回の実習から成っている。講義では、まず全員に対しコミュニケーションについての基本的な知識や模擬患者とはどのようなものかについて解説した。さらに実習で行なう内容と、心構えや準備することについて説明した。学生に対して行った説明の要点は以下の通りである。

- ①実習では、模擬患者が登場する。
- ②学生は「話し手」として、5 分間、模擬患者に対して話をする。模擬患者は「聞き手」である。
- ③話すテーマは、「自分はこんな医師になりたい」である。内容のまとめ方のヒントとして、「自分はどんな医師になりたいか」、「何故、そう考えたのか」、「そうなれるように、自分はこれからどんなことをしようと考えているか」について、あらかじめ整理しておくとしやすい。
- ④相手に理解してもらえるような話し方をする。すなわち、話の組み立て、声の大きさ、話す速さなどに留意し、工夫すること。
- ⑤一方的な“演説”になってしまわないよう、聞き手の理解を確認しながら、できるだけ“会話”をするよう心がけること。
- ⑥事前に、クラスメートを相手に、練習をすること。その際、互いに「評価シート」をつけ、参考にすること（図 1）。
- ⑦身だしなみも大切である。模擬患者さんという、初対面の、年長者に、授業というオフィシャルな場で面談し、自分の話を聞いて頂くのにふさわしい服装や髪型をしてくること。
- ⑧模擬患者さんに対し、きちんと挨拶と自己紹介をすること。挨拶をするときは、目線の高さを合わせて、お辞儀をすること。話の終了時には、必ず御礼を言うこと。
- ⑨実習をしてみれば、おそらく「上手に話すことは意外に難しい」と思うはずである。しかしこの実習

1年次「臨床医学入門」“模擬患者さんと話してみよう”
コミュニケーション実習 評価シート

話し手: _____	評価者: _____
	良い まあまあ 要改善
1. 話し手の身だしなみは？	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
2. 模擬患者さんへの挨拶は？	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
3. 自己紹介は？	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
4. 話の切り出し方は？	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
5. 視線の向け方は？	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
6. 敬語の使い方は？	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
7. 質問に対する返答は？	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
8. 声の大きさは？	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
9. 話すスピードは？	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
10. わかりやすさは？	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
11. 面談中の姿勢は？	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
12. 聞き手への配慮は？	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
13. 面談中の雰囲気・態度は？	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
14. 全体的には？	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
<自由記載欄>何でもどうぞ	

図1 模擬患者との面談中に学生がつける評価シート

を通じて「実際の医療現場で患者さんは、診察室で、初対面の医師に、自分の症状や思いを伝えるのが、どんなに大変と感じているか」を想像できるようになってほしい。そして「上手に聞く」ことは、さらに難しいことであることも感じてほしい。

実習は、学生を4班に分け、1回に約25名を対象に行なった。実習の具体的な手順は以下の通りである。

- ①学生を1グループ4～5名で、6グループに分ける（6つのテーブルに着席）。
- ②1グループに1名ずつ模擬患者が付く。
- ③学生1名が、話し手として、5分間、模擬患者に「自分はこんな医師になりたい」について話す。
- ④他の学生は、評価者として「評価シート」（図1）をつける。うち1名はフィードバック時の司会者を兼ねる。
- ⑤5分たったら終了。司会者が司会をして、8分間のフィードバックを開始する。
 1. まず話し終わった学生に、自己評価を述べてもらう。
 2. 次に他の学生の評価者から、「良かった点」、「こうしたらもっと良くなる点」について、コメントを述べてもらう。
 3. 最後に模擬患者からもフィードバックを行う。



図2 模擬患者と真剣に対話する1年次学生

- ⑥模擬患者は隣のテーブルに移動する。
- ⑦次の学生に交代して、繰り返す。
- ⑧本実習の終了時に、学生に今回の実習に参加して感じたことをアンケート用紙に自由記載してもらった。
- ⑨模擬患者にも、各回の実習の終了時に、自由記載形式で感想を記してもらった。

【結果】

1. 実習全体として

学生達は、定められた手順に従い、真面目に、真摯な態度で実習を行なうことができていたが、初めて模擬患者を目の前にして、かなり緊張した面持ちの者も多かった。実習風景を図2に示す。「自分はこんな医師になりたい」について、よどみなく話す学生が多く、話す内容について相当な準備をしてきたことが窺われたが、中には緊張のためか早口で一方的にしゃべってしまい、5分間の持ち時間を余してしまう者もいた。しかし、そのような場合も模擬患者が、適度に相づちを打ったり、逆に学生に質問をしたりして、できるだけ“会話”が成り立つように、模擬患者側からの配慮が見られた。フィードバック時の話し手の学生の自己評価としては、「緊張して頭が真っ白になってしまった」、「思ったことの半分も話せなかった」などと語る者が多かった。同グループの学生からのフィードバックとしては、「自分の考えが、よく伝わっていたと思う」、「落ち着いて話すことができていた」、「話の組み立てや話し方に工夫が見られた」など評価する意見とともに、「もう少し大きな声で話すともっと良かった」など、建設的な意見を述べることもできていた。模擬患者からのフィードバックは、さらに建設的、形成的であり、「今の気持ちを大切に持ち続けて、いいお医者さんになって下さい」、「あなたのような考え方がお医者さんになってくれれば、きっと医療はもっと良くなる」など、学生の語る夢を肯定的に受け止め、その夢に向かってさらに努力を重ねるよう励ますものも多かった。また、たとえあまり上手に話せなかった学生に対しても「言葉より先に、心が伝わってきました」などと、学生の気持ちを傷つけないよう巧みな配慮がなされており、また会話の内容とは別に、「患者は、医師に十分話を聞いてもらえれば、それだけで半分くらい治ったような気になるもの」といった、今までの模擬患者活動の中で体得した“患者の心理”を学生に語る姿も見られた。

服装や髪型など身だしなみについても、総じて問題はなく、模擬患者から改めて指摘を受けることはなかった。男子学生、女子学生とも、約7割程度がスーツ姿であった。

2. アンケート結果として

〈学生の感想〉

実習終了時に自由記載させた感想には様々なものがあったが、以下のようないくつかの内容に分類できた。

(1) 自分の行なった面談に対する自己評価について

目立っていたのは、緊張して十分に話すことができなかつたとするものや、初対面の人に自分の思いを上手に伝えることの難しさについて記したものであったが、問の取り方や敬語、会話中の思いなどについて、気づいた点を述べているものもあった。

- 初対面の人と意思疎通を図ることの難しさを再認識した。
- 自分の気持ちを相手にわかりやすく伝えることの難しさを感じた。
- ととても緊張したので、話したいことがうまく伝わらなかった。
- 自分自身の反省として、話の区切りで間をおくと良いと思った。
- 普段正しい敬語を使えていないと、このような場でも正しく使えないことがわかった。
- 模擬患者さんと会って話すうちに話したいことがどんどん頭にあふれてきて、5分間ではすべてを話し切れなかった。
- 同級生と雑談するのと模擬患者さんと話をすることは全く異なることがわかった。

(2) 他の学生が行なった面談について

他の学生の話し方を見て、わかりやすい話し方や雰囲気など、自分との違いを感じ取ったとする意見が多く見られた。

- 自分が話しているときはそれで精一杯であったが、他の学生が話しているときは、視線、表情、雰囲気などについて、どうすれば話しやすく、聞きやすいのかを考えることができた。
- 他の人の話す様子を見て、わかりやすい話のスピードや声の大きさが理解できた。
- 柔らかな話し方をして、和やかな雰囲気をかもし出している人もいて、驚かされた。
- 会話が苦手なのは自分だけではないのだとわかって、少々安心した。これから周りと一緒に成長していきたい。

また、他の学生が話した内容について興味を持ち、感銘を受けたとする意見も多かった。

- クラスメートの話は、「患者さんのことを想っている」点では自分と同じなのだが、理想の医師像のかたち、目指すきっかけは、環境や体験を通して十人十色で、おもしろく感じた。
- 皆、しっかり自分の将来の医師像に対するビジョンを持っていて、すごいなあと思った。
- 同じ医師という職業を目指す仲間が、どのような理想、動機を持っているのかを知ることができたことは、今後の自分の励みになった。

(3) 模擬患者について

模擬患者について言及した感想は大変多く、ほとんどの学生が何らかの記載をしていた。まず目立っていたのは、「聞き上手な模擬患者に助けられた」としたものであった。

- 模擬患者さんの持つ「話しやすい雰囲気」にとっても助けられた。
- 私を担当してくれた模擬患者さんの持つ穏やかな雰囲気のおかげで、互いに笑顔で話すことができた。
- 自分の話に耳を傾けてくれて、アドバイスももらい、なんだかとても元気が出た。
- 正直緊張したが、そのような状態にあっても話しやすいと感じたのは模擬患者さんのおかげ。

- こちらが緊張していても、話が少々あいまいでも、模擬患者さんはしっかりと受け止めてくれており、聞き手の態度の大切さを学んだ。
- 自分も模擬患者さんを真似て聞き上手になりたい。
- 模擬患者さんが相づちを打ってくれたり、質問してくれたことで、自然に言葉が出てきて、言いたいことを伝えることができた。

模擬患者への感謝の気持ちを述べた感想も非常に多かった。

- 模擬患者さんに感謝したい。
- 4年次のOSCEのときは成長した姿を見せられるように頑張りたい。
- 4年後に成長した姿を見せることによって、また立派な医師になることによって恩返しをしたい。
- 医師になるには、このような様々な人たちの支えが欠かせないということを学んだ。
- 自分たちのためにわざわざ時間を割いて来てくれた模擬患者さんに感謝したい。
- 模擬患者の方々の温かみを感じ、自分は幸せ者だと感じた。そういう方々の期待に応えられるよう、これからも自分を高めていきたい。
- 模擬患者さんはとても怖いイメージがあったが、実際はとても気さくで、本当に心から医学生の教育を考えて下さっているのだということ、会話の中でひしひしと感じた。
- 「ほっとする雰囲気だ」、「言葉より先に心が伝わってくる」、「もっと聞きたい」と言われ、本当に嬉しかった。
- もっと模擬患者さんと話がしたい。絶対におもしろいと思う。
- 模擬患者さんが話を聞こうとしてくれるのが伝わってきて、とても助けられた。将来自分が医師になってときに、「聞こう」、「理解しよう」とする姿勢がとても大事になってくると思った。
- 患者側から見て、医師はどのように見えるのか、自分たちにどんな医師になって欲しいのかという生の声が聞くことができ、貴重な経験になった。

「心に残った模擬患者さんのことば」について、述べている感想も多く、模擬患者の述べた含蓄のあるひと言が、学生に強い印象を残していることが窺われた。このような言葉の大半はフィードバックの時に、模擬患者から学生へ伝えられたものであった。

学生たちの印象に残った模擬患者の言葉

- 「ヘラヘラした笑顔」と「相手を迎える笑顔」は違う。
- 相手を思いやる気持ちが大切。
- 患者は病院に来て、話しやすい医師だと、話を聞いてもらえただけで病気が良くなるような気がするもの。
- 自分に適度の自信を持ち、ごく自然に会話することが大切。
- これから6年間、知識と経験を積み重ねていけば、きつとうまく話せるようになる。
- 「心を拾ってくれる医師」になって欲しい
- すべてを言葉にしなくても、話し方一つで伝わることもある。あなたはそれができていた。
- 成長というものは無理してするものではない。「好きだ」という気持ちや「患者さんのために」という気持ちが成長へと自然につながっていくものだ。
- 言葉を選ぶのも大切だが、気持ちがあれば伝えたいことを伝えられるので、ありのまま話することができるようになればいい。
- 患者にとって「理想の医師」とは、まず自分の話をしっかり聞いてくれる医師。
- 大事なことは、患者さんや患者さんの家族を不安にさせないこと。

- 病気にかかることで人生観が変わることがある。
- 一步踏み出してみる事が大事。一步目を踏み出せない人は、二歩目を踏み出すことはできない。
- 優しさだけではなく毅然とした態度も必要。
- 人柄というものは押し出すものではなく、滲み出るもの。
- 日頃から他者と積極的に関わるように心がけるといい。
- 今を本気で生きる。
- 人格は一夜漬けでは作れない。
- 良い医師とは、患者の不安を受け取ってくれる医師。

(4) 自分が将来出会うであろう患者への思いについて

今回の実習を通じて、患者が初対面の医師と外来で会話をするときの気持ちを想像し、「医師としての自分は、将来どうあるべきなのか」について言及した感想もあった。

- 患者は自分の病気を抱えながら初対面の医師と話す。これは今回自分が模擬患者さんと話をするくらい緊張することだ。必要なのは「話しやすい雰囲気」だ。
- 医師になってからは、毎日のように初対面の人に顔を合わせることになるが、相手に信じてもらえる力、話してもらえぬ雰囲気を、自分から作れるようにしなければならない。
- 「聞く」ことは「話す」こと以上に難しいのだと思う。上手に聞けるようになりたい。
- 医師のひとと言ひと言は、とても重要なのだと思った。
- 「患者さんの気持ち」を経験することができて、とてもいい実習になった。
- 患者さんの緊張を解けるような雰囲気を持つ医師になりたい。
- やわらかい雰囲気や、そういった人柄が滲み出るような医師になりたい。

〈模擬患者の感想〉

模擬患者に自由記載してもらった感想では、学生に対する好意的な評価が述べられているものが多かった。

身だしなみについて

- 身だしなみ、髪型もそれなりに気を使っているのが伝わってくる。
- 服装、態度は好ましいと感じました。
- 学生さんは、皆さんきちんとスーツを着ていてびっくりした。
- スーツ姿が目立ち、良かったです。

態度について

- 皆さん表情が柔らかく、初めての实習とは思えないほどです。
- どの学生も一生懸命で、真剣さが伝わってきました。
- どの学生も緊張しているにもかかわらず、きちんとした態度で臨み、良かったです。
- 皆さん、とても誠実で、感じよく話をしてくれました。
- 初対面なのに、緊張があまり見られず良かったです。
- OSCEで、また出会うのが楽しみ。

会話の仕方とその内容について

- 短時間で会話のキャッチボールをしながら言うべきことを伝えるのは大変だと思うのですが、よく頑張っていました。

- 限られた時間で、それぞれの学生さんが自分の医師像を話せたと思います。
- 具体的な例をまじえた話が多く、言いたいことがよく伝わってきた。
- 思いやりのある、患者の立場を考えた医師になりたいと話していたので、その気持ちを持ち続けてほしい。
- 話し方を何回も練習している様子で、素晴らしい考え方を述べていた。心構えも良かった。
- 実体験などを交え、とても筋道を立てて話をしてくれた。熱意もとても感じられた。
- 自分の医師像をはっきり持っている学生が多かったので素晴らしいと思った。
- ドキドキはしていても、皆上手に会話ができていたと思います。
- 地域医療に関心のある学生もいて、とても心強く思いました。

少数ではあるが、以下のような学生について言及している意見もあった。

- 話が先に終わってしまい、あと何を話したらよいか考え込んでいた学生がいた。緊張のなせるわざでしょうか。
- 一応話すことを考えてきたのですが、「何とかなるだろう」という軽い感じで臨んでいた学生がいた。
- 自分の考えというよりは、親の考えに強く影響を受けているのではと感じられる学生がいた。

【考察】

(1) なぜ学生が模擬患者に語るのか

4年次 Pre BSL や OSCE で登場する模擬患者とは、医学生（4年生）に対して文字通り患者役を演じてくれる人のことであり、通常、模擬患者が話し手、医学生が聞き手である。にもかかわらず今回の実習では、あえて医学生（1年生）を話し手、模擬患者を聞き手とした。4年次実習とは逆の役回りにした理由については、東邦大学医学部で行なわれている1年次のコミュニケーション実習を参考とした²⁾。同大学では、コミュニケーション教育において「聞く」だけでなく「伝える」トレーニングも重視し、学生が模擬患者に対して語る面談実習を行なっている。語るテーマは「自分のお気に入り・楽しかった思い出」である。この実習により、学生は他者に自分の思いや考えを伝えることの難しさを感じるとともに、伝わったと感じたときの嬉しさも実感するという。これに基づき、本学では学生の話をも模擬患者が聞くことにより、学生に「自分の話を受け止めてもらえた」とする体験をさせ、いい医師と出会った時の患者心理を疑似体験させることができるのではないかと考えた。実際に本学の実習後の感想を見ると、相手に上手に伝えることの難しさに言及したものも多かったが、聞き上手の模擬患者が持つ「話しやすい雰囲気」に助けられ、自分の思いを伝えることができたと述べているものが多かった。さらには、医師として「相手の話に耳を傾ける」ことの重要性についての気づきが述べられた感想もあった。

(2) なぜ語るテーマは「こんな医師になりたい」なのか

本学では1年次学生たちに、「臨床医学入門」の教育の一環として、入学直後の4月に「自分はこんな医師になりたい」をテーマとして2000字程度の作文を書かせている。さらに、同じく「臨床医学入門」の授業中に、4月～5月にかけて、1人2分の持ち時間で、同級生全員の前で「自分はこんな医師になりたい」というテーマでスピーチをする機会がある。従って今回、模擬患者に対して語ったことは、同じテーマについて考える、入学後3回目の機会であった。3回も同じテーマについて考える機会があると、たとえ入学直後はあやふやであった内容でも、同級生らの発表内容に刺激され、自分なりに考察を深め、かなり洗練されたものになってくる。どのような医師を目指すのか、その理想像とそこに至る道について考えつづけることは、学生に自覚を促すことになり、医師のプロフェッショナルリズムを涵養する上で重要であると考えられる。今回の実習の中で、自分の目指す医師像をかなりしっかり語れる学生

が多かったのは、このような事前の教育によるところが大きいと思われた。

(3) 実習後の感想から窺える本実習の教育効果

「人と会って面談すること」は、コミュニケーションの基本であり、これを上手に行なうためには、服装・髪型、話すスピード、声の大きさ、わかりやすい表現、敬語、表情など、多面的に考え工夫する必要があることを、多くの学生が気づいていた。このことはそのまま他者への配慮につながってくるものと思われた。このような他者への配慮は、医師のプロフェッショナリズムのうち、Interpersonal professionalism（他人に対するプロフェッショナリズム）の涵養にも通じてゆくと考えられた。感想文で、模擬患者の前で緊張し思うように話せなかったが、ベテランの模擬患者からの助け舟で救われたと述べている学生が多かった。このことは、立場を換えて初対面の医師の前で、十分に自分の思いを伝えることのできない患者の心理を想像することを容易にさせていた。加えて「医師は相手の話を聞こうとする姿勢が大事」、「話しやすい雰囲気を持った医師になりたい」など、患者に対する思いやりを表わす言葉も見られ、小さいながら医師としての自覚が芽生えていたように思われた。一般に職業人を教育する際に、社会に対する使命感や相手に対する責任感を醸成するために、具体的にどのような方法を用いれば効果的なのかは、なかなか定めがたい問題である。しかしながら、今回の実習のように、たとえ医学部低学年の学生に対しても、模擬患者という“相手”、“対象”を目の前に登場させれば、医学生は己の役割を考えざるをえない状況になる。人は他者との関係性の中で、初めて自らの役割を認識できるようになると言えるのかもしれない。

参考文献

1. 大串和久、大沢 弘、加藤博之：医学部医学科臨床入門科目「Pre BSL」における模擬患者による医療面接実習の教育効果. 21世紀教育フォーラム 第4号：11-16、2009.
2. 岸太一、佐伯晴子、高松研、坪井康次：1年次面談実習における学習効果. 医学教育 第40巻・補冊：83、2009.